

2018/11/11

「イエスへのつまずき」

■イエスの実像

イエスという方は、この地上で、どのような方だったのでしょうか。私たちは、神という前提でイエス様を見ていますが、一度その前提を取り払って、当時の人々と同じようにイエスという人物を見た時、自分はどう思うかを考えてみましょう。

ユダヤ人は、長い間、旧約聖書の救い主が来られるという約束を信じて待っていました。当時のユダヤ人はイスラエルという国を失っていたので、救い主とは、イスラエルという国を再興してくれる方、あるいは生活を豊かにしてくれる方、行いと教えの素晴らしい方、ダビデを超える王といった期待を人々は持っていました。そこに、イエス・キリストは登場したのです。

「イエスは、そこを去って道を通りながら、収税所にすわっているマタイという人をご覧になって、「わたしについて来なさい。」と言われた。すると彼は立ち上がって、イエスに従った。イエスが家で食事の席に着いておられるとき、見よ、取税人や罪人が大ぜい来て、イエスやその弟子たちといっしょに食卓に着いていた。すると、これを見たパリサイ人たちが、イエスの弟子たちに言った。「なぜ、あなたがたの先生は、取税人や罪人と いっしょに食事をするのですか。」」（マタイ 9:9-11）

取税人というのは、ユダヤ人から見ると、ローマの手下になった裏切り者です。彼らは、ローマにこびへつらいながら、同胞であるユダヤ人からお金を搾取し、自分の懐にも入れて高利貸しをするという、今でいうやくざのような存在でした。つまり、イエス・キリストはやくざを見かけたので、「ついておいで」と声をかけ、それにつられてやくざや不良がぞろぞろ集まってきて、イエス様や弟子たちと一緒に食事をしていたということなのです。

あなたはそういう人を見てどう思うのでしょうか。やくざとつき合いのある人なんて恐ろしい、危ない人ではないのかと思わないのでしょうか。当時の人たちも、罪を犯した人たちと交わろうとはしませんでしたから、イエス様が彼らと共に食事をしているのを見て、神の教えを忠実に守ろうとしているパリサイ人たちはつまずいたのです。

つまり、イエス様の行いは、人々から見てとても素晴らしいと思えるような行いではありませんでした。「イエス様は神なのだから、その行いは立派だったはずだ」という思い込みを捨てると、とても立派な行いとは言えず、つまずかれて当然のような行いをしていたのです。

「イエスはこれを聞いて言われた。「医者が必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。『わたしはあわれみは好むが、いけにえは好まない。』とはどういう意味か、行って学んで来なさい。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです。」するとまた、ヨハネの弟子たちが、イエスのところに来てこう言った。「私たちとパリサイ人は断食するのに、なぜ、あなたの弟子たちは断食しないのですか。」(マタイ 9:12-14)

イエス様が、「私は世の中の立派な人間には興味がない。罪人が大好きなのだ。」と言うものですから、彼のところには悪いことをする人がどんどん集まってきました。

さらにイエス様は、皆が守っていた断食もしませんでした。ユダヤ人は神を信じ、それをもとに作った法律があり、非常に戒律を重んじる人々です。ところが、イエス様は、そのようなルールをことごとく無視したのです。ヨハネの弟子とは、イエス様を支持する側にいた人々ですが、その人たちですら、「なぜイエス様は断食しないのか」とつまずいたとあります。

もし、今の時代、やくざと不良ばかりをもてなし、法律を無視する人がいたら、あなたは思うでしょうか。イエスは神だという前提をはずして考えてみたらどうでしょう。イエス様は、その理由を説明するのに、次のように言われました。

「人は新しいぶどう酒を古い皮袋に入れるようなことはしません。そんなことをすれば、皮袋は裂けて、ぶどう酒が流れ出てしまい、皮袋もだめになってしまいます。新しいぶどう酒を新しい皮袋に入れれば、両方とも保ちます。」(マタイ 9:17)

■あなたの価値観を壊すため

イエス様は、「新しいぶどう酒は新しい皮袋に入れなければならない。私は新しい皮袋を造るために来た。」と言われました。つまり、私たちが持っている価値観を壊すために来た、ということです。

イエス様は、人々がメシヤに期待していた、国の再建をすとか、暮らしを豊かにしてくれるとか、力ある王ではなく、貧しい労働者階級である大工の息子として生まれ、自分のことを神だと言い、罪人と交わるような方でした。こんな方が神であるというなら、私たちの価値観は粉々に壊されます。イエス様は、私がルールを破るのは、古いルールを壊し、新しいルールを造るためだと言われたのです。

「イエスがこれらのことを話しておられると、見よ、ひとりの会堂管理者が来て、ひれ伏して言った。「私の娘がいま死にました。でも、おいでくださって、娘の上に御手を置いてやってください。そうすれば娘は生き返ります。」……イエスはその管理者の家に来て、笛吹く者たちや騒いでいる群衆を見て、言われた。「あちらに行きなさい。その子は死んだのではない。眠っているのです。」すると、彼らはイエスをあざ笑った。イエスは群衆を外に出してから、うちにおはいりになり、少女の手を取られた。すると少女は起き上がった。このうわさはその地方全体に広まった。」(マタイ 9:18、23-26)

イエス様は少女を生きかえらせ、その間に、長血の女もいやし、その噂はその地方全体に広まったとあります。

病気を癒し、死人をよみがえらせる人がいるという噂を聞いたら、あなたはどう思いますか。たいていの人は「そんなうさん臭い話、嘘だろう」と思うことでしょう。しかも、その人は自分のことを神だと言っているのです。そして、さらに奇跡は続き、見えない人が見えるようになり、悪霊が追い出されたという噂が広まりました。

その話を聞いて、すぐに「よし、イエス様にお願いに行こう」という人はあまりいないはず。常識を持った人ほど、あり得ないとつまづくことでしょう。実際、人々から尊敬を集めていたパリサイ人たちは、つまずきました。さらにイエス様は「内側を変えるのだ」と革命的なことまで言いだし、宮の前で商売をしていた店を次々とひっくり返しました。今でいうなら、商店街をぶっ壊すようなものです。悪人たちと交わり、こんな迷惑をかける人が、自分は神だと言ったところで、誰が信じるというのでしょうか。イエス様のしたことは、つまずき以外の何ものでもありません。

「わたしが来たのは地に平和をもたらすためだと思っはなりません。わたしは、平和をもたらすために来たのではなく、剣をもたらすために来たのです。なぜなら、わたしは人をその父に、娘をその母に、嫁をそのしゅうとめに逆らわせるために来たからです。さらに、家族の者がその人の敵となります。わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。また、わたしよりも息子や娘を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしにふさわしい者ではありません。自分のいのちを自分のものとした者はそれを失い、わたしのために自分のいのちを失った者は、それを自分のものとします。」

(マタイ 10:34-39)

イエス様は、はっきりと「自分は平和をもたらすために来たのではない」と語っておられます。イエス様は、私たちがイエス様を理解できるように説得し、納得してもらうために来られたわけではないのです。「自分のいのちを自分のものとする」とは、「自分の持っている価値観で自分を成功に導く」という意味です。人は、自分の考え、すなわち古い皮袋をそのままにして、成功しよう、人に良く思われようとしています。そんなことをしていると命を失うとイエス様は教えておられるのです。反対に、「わたしのために自分の命を失う」とは、イエス・キリストを信じて自分の物差しを変え、古い皮袋を壊して新しい皮袋に造りかえるということで、そうすれば、あなたは自分の本当のいのちを手にすることができるということ。おられるのです。

■つまずかない者は幸いである

「だれでも、わたしにつまずかない者は幸いです。」(マタイ 11:6)

「イエスは神である」という前提を取り払った時、みんなが期待するような王ではなく、自分は神だと言い、奇跡を行ない、取税人や罪人と一緒に食事をするような人を信じることを、あなたはためらわないでしょうか。今の時代にも、自分は神だと言う人がたくさんいます。病気を治すという人もたくさんいます。けれど、ほとんどの人はそんなのは嘘だと言ってつまずき、そんな人を信じたらまわりからバカにされてしまいます。

イエス様ご自身も、ご自分がなされることはつまずきだと認めておられます。なぜわざわざ人間の常識とは正反対のことを行なったうえで、つまずかないものは幸いだと言っておられるのでしょうか。

実は、そこに深い神の愛が隠されているのです。それは、イエス様は、あくまで信じるしかない対象であり、あなたが納得するような対象ではないということです。神とは、自分の期待通りに動いてくれたら信じる、あるいは自分の頭で納得したら信じる、というような対象ではないのです。自分の価値観でつまずくということは、信じるか信じないかの選択しかありません。それでもつまずかず、ただ信じる者は幸いであるとイエス様は言っておられるのです。

■神の知恵とは何か

パウロは、立派なパリサイ人でしたから、イエスのすることはとんでもないと思っていました。自分の価値観では、神を冒瀆している以外の何ものでもなく、パウロはイエスを信じる人々を迫害し、弟子たちを殺しました。

しかしパウロは、このつまずく以外考えられないイエスが神だと知り、神の深い思いを知ったのです。

「事実、この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです。それゆえ、神はみこころによって、宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救おうと定められたのです。ユダヤ人はしるしを要求し、ギリシヤ人は知恵を追求します。しかし、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えるのです。ユダヤ人にとってはつまずき、異邦人にとっては愚かですが、しかし、ユダヤ人であってもギリシヤ人であっても、召された者にとっては、キリストは神の力、神の知恵なのです。なぜなら、神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです。」（I コリント 1:21-25）

これが神の知恵です。イエス・キリストの十字架の死は、信じない者にとってはつまずきであり、愚かなことです。信じない者にとっては、自称神が殺されるのはみじめであり、死んだら意味がないと考えるのが当然です。しかし、信じる者は、その十字架の言葉にこそ力づけられます。

神の意図は、信じる者を救うところにあります。私たちに必要なのは、信じる信仰であり、自らが納得することではありません。人は、自分が納得できないと文句を言ってつまずきます。それは、神を自分の下に置こうとする行為です。しかし、イエスをただ信じる対象とするならば、祈ってうまくいかない時も、なお信じるしかできません。

「兄弟たち、あなたがたの召しのことを考えてごらんなさい。この世の知者は多くはなく、権力者も多くはなく、身分の高い者も多くはありません。しかし神は、知恵ある者はずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者はずかしめるために、この世の弱い者を選ばれたのです。また、この世の取るに足りない者や見下されている者を、神は選ばれました。すなわち、有るものをない者のようにするため、無に等しいものを選ばれたのです。これは、神の御前でだれをも誇らせないためです。しかしあなたがたは、神によってキリスト・イエスのうちにあるのです。キリストは、私たちにとって、神の知恵となり、また、義ときよめと、贖いとになりました。まさしく、「誇る者は主にあって誇れ。」と書かれているとおりになるためです。」（I コリント 1:26-31）

自分の皮袋を変えず、自分が納得できれば神を信じようという態度は、神を自分の下に置いているということであり、神の上に立っているということです。神はそのようなことを許しません。ですから、あなたが自分で納得できないように、わざわざご自分をつまづきの石とされたのです。そして、人間の力ではどうすることもできない死について、「私を信じる者は死んでも生きる、復活するから信じなさい。」と語っておられるのです。

あなたはイエスという方を信じる対象として見ているのでしょうか。それとも、自分が納得できる対象として見ているのでしょうか。納得できる対象として見る限り、あなたはイエスに近づくことはできず、神の恵みに預かることもできません。ただ信じる信仰が必要なのです。

無茶なことだと思えるかもしれませんが、自分が置かれている現状をよく考えてみてください。自分の皮袋を守り、自分の物差しで生きてきて、あなたは幸せですか。死んだらどうなるか、その先がわかっていますか。目をそらさずに現状を見、自分でどうにもならないことに気づくなら、神に助けを乞うしかないのです。

「私を信じなさい。」そう言って神は、「重荷を負うものは私のところに来なさい、私が休ませてあげる」と、御手を差し伸べておられます。

死という問題は、信じなければ解決しません。神が私たちに求めておられるのは、ただ信じることです。だから、わざわざ頭で理解できないことをするのです。つまづきの石となり、信じてつまづかない者は幸いだと語っておられるのです。頭で考えると、「なぜ」「どうして」と思ってしまうのですが、「イエス様がそう言うなら信じます」とついていく信仰を、神は求めておられるのです。

イエス・キリストとは信じる対象であって、それ以上でもそれ以下でもありません。自分が納得したら信じてやろう、献金してやろう、祈りを聞いてくれたからもうちょっと奉仕しようか……あなたは、そのように考えてはいないでしょうか。そうではないのです。あなたのメガネで見る限り、イエス様はどこまでも納得できない、つまづきの石です。しかし、その価値観を壊してしまえば、素晴らしい方だと気づきます。なぜなら、その時、あなたは自分が罪人だと気づくからです。自分は立派だ、まじめな人間だと思っているそのメガネが外れると、自分は罪人だと気づきます。そして、イエス様があの時交わった罪人は私だとわかるようになり、イエス様は、こんな私を愛して交わってくれていたのだと知ることができれば幸いです。